座談会

# 「船員さんのひみつ」を読んで船員さんになってほしい

**全日本海員組合と国際船員労務協会が取り組む『J-CREWプロジェクト～やっぱり海が好き～』の一環として、小学校高学年向け学習まんが「船員さんのひみつ」がこのほど完成した。小学生の男女3人が一人前の外航船員になるまでの姿を描き、船員の仕事の魅力とその業務が日本人の暮らしに果たす役割を伝える。制作担当の三家本慎司氏、シナリオ・構成を担当した橘悠紀氏、作画を担当したマンガ家のおがたたかはる氏のお三方に、「船員さんのひみつ」の制作秘話や本作に込めた思いを語っていただいた。**

株式会社学研プラス　制作担当
**三家本 慎司**氏（中央）
シナリオ・構成者
**橘 悠紀**氏（右）
マンガ家・イラストレーター
**おがた たかはる**氏（左）

## 職業について学ぶ教材として活用してほしい

**――まずは三家本さん、「学研まんがひみつシリーズ」の概要をお話しいただけますか。**

**三家本■**　このシリーズは自然や科学をテーマに、1970年代に書店売りからスタートしたロングセラー商品「学研まんがひみつシリーズ」をモデルにした企画と言えます。企業や団体から協賛をいただいて制作する「学研まんがでよくわかるシリーズ」は、2001年のスタート以来、年間10冊近いペースで発刊しています。現在、118巻まで発行されています（6月末現在）。

「よくわかるシリーズ」が企業・団体の方に評価されている背景には、やはり単独では教育機関に教材を制作、配布するノウハウとルートの確保が難しいためです。そこで、長い時間をかけて教育現場と信頼関係を築いてきた学研が間に入り、“まんが本”というわかりやすい形で教育機関に情報をご提供します。

私たちとしても、子どもの身の回りにある様々なものをわかりやすい教材としてまとめてお届けすることは、企業と一緒に教育現場に貢献できる点で、高い価値があると思っています。

**――数あるシリーズの中で、今回の「船員さんのひみつ」の特徴は何ですか。**

**三家本■**　「船員さんのひみつ」は、厳密に言えば、これまで118巻出ている「学研まんがでよくわかるシリーズ」の姉妹企画として刊行している「仕事のひみつ編」の5巻目に当たります。シリーズ本体は商品やサービスをテーマに据えているのに対し、「仕事のひみつ編」は世の中の様々なお仕事を紹介することが目的です。これを読んで子どもたちが将来を考えるきっかけにしてほしいという思いがあります。シリーズ本体に比べより進路指導教材に近いのが特徴です。

三家本氏

今、日本では全般的に労働人口が減り、人材が不足しており、若い人の間では非正規雇用などの問題もあります。海運

の世界でも船員不足は深刻と言われています。だからこそ、小学生の頃から職業について考えてもらう必要性は高まっています。「船員さんのひみつ」をはじめ「仕事のひみつ編」はそのニーズに対応する教材です。教育現場でもどんどん活用していただきたいですね。

## 乗船取材がシナリオ作りに役立った

**――次に橘さんにお聞きします。肝となるシナリオづくりの進め方について教えてください。**

橘氏

**橘■**　「よくわかるシリーズ」自体はこれまで30巻ほど手掛けていたので、完成までの流れはある程度把握していました。

ただ、「仕事のひみつ編」は今回が初めてでしたから、最初は手探りの部分が多かったですね。三家本さんがおっしゃったように「よくわかるシリーズ」が商品やサービスにスポットを当てているのに対し、「船員さんのひみつ」は船員という職業そのものにスポットを当てています。しかも私自身は船員さんが実際どのような仕事をしているのか、またその人数がここまで減少しているとは知りませんでした。

そこでまず、船員という仕事の中身やどういう人たちで構成されているのかなどを資料や取材などで把握する作業に着手しました。同時に、「この本で子どもたちに何を伝えるか」を意識し、関係者と調整しながら制作を進めました。

つまり実態を把握することが最初のカギを握っていました。幸運にも、この企画が決まってすぐの2015年9月下旬、乗船取材の機会がありました。この経験があったからこそ、船員さんの業務を私なりに一通り把握でき、シナリオのイメージを膨らませることができたと思います。

**――実際に乗船していかがでしたか。**

**橘■**　乗ったのはコンテナ船でしたが、まずその大きさを実感できました。乗組員の皆さんは交代で昼夜問わず働き、「大変だな」と感じました。乗船したのは2泊3日で、私たちも4時間程度の睡眠で取材を続けました。貴重な経験でしたね。若い方も含めて乗組員の皆さんが、顧客から預かった貴重な荷物を細心の注意を払って目的地まで運ぶ、という職務を全うされているのを間近で感じることができ、感服しました。

## 船員の意見も反映し船を細部まで描写

**――おがたさん、まんが制作はどのようなプロセスで進めるのですか。**

おがた氏

**おがた■**　橘さんが作られたシナリオを元に、まずキャラクター（登場人物）の絵を描いて関係者の了解を得ます。そして、セリフをページに配置しながらコマ割り、下絵、ペン入れと進めていきます。

これまでも「よくわかるシリーズ」を手掛けたことはありましたが、「仕事のひみつ編」は今回が初めてでした。

通常、「よくわかるシリーズ」の主人公は子どもなら子どものまま完結しますが、「船員さんのひみつ」は主人公3人が子どもから大人へと徐々に成長していくのが特徴です。どの場所で誰が何を話したのかが読み手に分かりやすくなるよう注意してシナリオ配分を行い、ラフ（下描き）を起こしていきました。

まんがの制作は従来、まんが紙に描いて版下を作って印刷、という形ですが、私の場合、ラフから完成までの全ての作業について液晶タブレットを使いながらパソコンで仕上げています。もちろん手は使っていますが、入力がデジタルになっているのが従来の描き方との違いですね。効率的ですが、書き直しやすい分、体力は使います。

**――中でも苦労した点はありますか。**

**おがた■**　最終的にスケジュールがタイトになった点でしょうか。通常、このシリーズは完成まで10カ月から1年かけますが、「船員さんのひみつ」は約9カ月でした。時間的にはタイトでしたが、その分、集中して描くことができました。

また、作画は実物を見ながら、というのがベストですが、今回は船が主な舞台ということもあり、取材して撮影した写真など、限られた情報でどう描くかには苦労しました。描き始めてから、「ここはどうなっているか」という詳細が気になり出すのです。私も訪船取材をしましたが、すぐに「同じ船をもう1回訪船させて下さい」という訳にはいきません。取材し切れなかったところは他の資料で補いました。

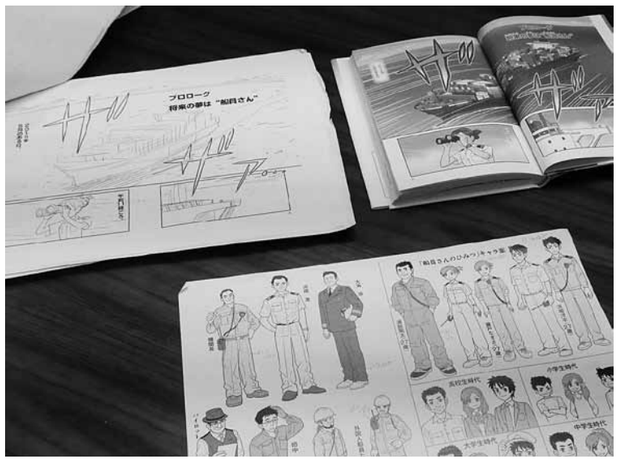
**橘■**　シナリオは文字ですから「船を真上から見たカット」など自由に書くことができますが、それを絵にするおがたさんは大変ですよね。

**おがた■**　大変でした（笑）。特に船はあまり自由に描くと嘘くさくなってしまいます。細かい部分まで気を遣いました。ラフを描いた後、実際の船員さんと何度も話す機会を設けてもらえたので、「ここの形が違う」などのご指摘もたくさんいただいて、修正を重ねました。

## 親子で読んでもらい船員を選ぶきっかけに

**――三家本さん、制作担当の立場としてこの本をどう読んでもらいたいですか。**

**三家本■**　スタッフの最大の目標は、まずはお子さんに読んでもらい、船員という仕事を将来選ぶきっかけにしてもらうことです。


おがたさんが持っていたラフ案とキャラクター案。こうしたプロセスを経て「船員さんのひみつ」は完成した（写真右上）。

一方、保護者など大人の方にも読んでほしいです。例えばお子さんが学校で「船員さんのひみつ」を借りてきて、家庭で保護者の方の目に触れるというイメージです。保護者の方も普段、船員さんに触れる機会はほとんどないでしょうから、ご家庭で船員が果たす役割を考えてもらうことは意義深いと思っています。

また、この本は公立図書館にも置いてありますから、一般の方にも船員の仕事を知ってもらい、ゆくゆくは船員という仕事に向けた何かのムーブメントにつながると良いですね。

「仕事のひみつ編」自体にも掛かってきますが、子どもだけではなく、大人にも読んでもらいたい。特に日本の貿易量のほぼ100％が海上物流で、船員さんはその貨物を扱う大切な仕事を担います。その重要性を理解する教材として「船員さんのひみつ」が活用されることを願っています。

**――橘さんはどうですか。**

**橘■**　今回は小学生だった主人公3人が船員を目指して中学校、高等学校、大学あるいは専門学校へと進学し、最終的に船員という職業に就くまでを描くという、今までにない試みでした。主人公3人の心身の成長とその時間的な流れを綿密に整理した上で、船員としてそれぞれどんな立場で仕事をしているのかを分かりやすく示せるように試みました。そういった点でしょうか。

**――おがたさんはどこを見てほしいですか。**

**おがた■**　船の描写には力を入れました。特に冒頭の場面（迫力あるコンテナ船の航行シーン）で読者の心をつかんで「船って格好いいな」と思ってもらえるように心掛けました。併せて、楽しいことが始まると予感してもらえるよう考えて描きました。

あとは、キャラクターそれぞれの格好良さを感じて「こういう仕事に就きたい」とお子さんが感じてくれるとうれしいです。感情移入という言葉がありますが、主人公を身近に感じつつ、成長した彼ら彼女らに憧れを感じてもらえたらいいですね。同時に船員という仕事に憧れて、将来の選択肢の一つになることを願っています。■